

Title	イスラムの社会思想, 斎藤栄三郎著, 明玄書房発行
Sub Title	E. Saito, Social thought of Islam
Author	渡辺, 宏(Watanabe, Hiroshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1963
Jtitle	史学 Vol.36, No.4 (1963. 12) ,p.110(530)- 113(533)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19631200-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イスラムの社会思想

斎藤栄三郎著
明玄書房発行

渡辺 宏

績を有する博士が、体得した実態を織込んでイスラムの社会思想研究を発表されたことは誠に大慶の極みである。

本書の構成は(一)イスラムの成立^七節(二)イスラムの政治思想^{十四}節(三)イスラムの文化思想^{十五}節(四)イスラム法^十節(五)イスラムの経済思想^七節の五章に分れ、卷末に年表・系譜・参考書目・索引などを附し、全巻書きおろし八八〇頁に及ぶ大冊である。

さて第一章「イスラムの成立」pp. 35—88 はイスラムの成立過程を概観し、その特質を究めんとするもので、本書の序説に相当する。第一節「イスラムの意義」は語意を述べて俗にモハメダン或はモハメダニズムと呼ぶことの非なるを説き、イスラムの本義は完全平和にあると結論する。イスラムが仏教語の「南無」に等しいと喝破されたのは、ともすれば専門に心を奪われて狭い分野にとりこもりがちな吾々にとり全く目のさめるような啓示で、早くも博士の広い視野と豊かな学殖に打たれた博士がイスラム研究に着手されたのは昭和十五年(1940)新聞記者として中国の上海に駐在した折からで、爾来二十有余年倦むことなく文字通り内外万巻の書を読破すると共に、東南アジアその他の各地を踏破して実地にイスラムを研究されて來た。

従来わが国のイスラム研究は歴史・宗教・哲学・美術など人文科学分野の学徒が主体をなし、しかもその殆んどが現地を見知らぬ者であつたので、すでに社会科学の分野で幾多不滅の業

ジオ、テレビで解説に活躍する一方、学界における研鑽も著るしく商学博士並びに法学博士の両学位を帯びた有能の士である。博士がイスラム研究に着手されたのは昭和十五年(1940)新聞記者として中国の上海に駐在した折からで、爾来二十有余年倦むことなく文字通り内外万巻の書を読破すると共に、東南アジアその他の各地を踏破して実地にイスラムを研究されて來た。

従来わが国のイスラム研究は歴史・宗教・哲学・美術など人文科学分野の学徒が主体をなし、しかもその殆んどが現地を見知らぬ者であつたので、すでに社会科学の分野で幾多不滅の業

の体制を除いては共通するところ少く、かえつて積極性、現実性、寛容性などキリスト教とは逆な面にイスラム教の特質があると論ずる。第五節「イスラム經典の編纂」^三項はコーラン結集の事情からスンナ、ハディースまでを解説する。第六節「イスラムの本質」^五項はセム族の神観念に基づいてイスラムの哲学的基礎に及ぶもので、人間の本性は弱いが善惡を区別する能力を持つ故にイスラムの精神は性善の説であるとの結論はよくその本質を示している。第七節「イスラムの信仰」^六項は教徒の信心と勤行及び宗派までを説いたもので、イスラムは実践の宗教であり、実行を尊ぶものであることが如実に示されている。

第二章「イスラムの政治思想」pp. 88—450 はイスラムの歴史的発展を全地域全時代にわたって詳細に俯瞰し、その底に流れる政治思想を究明せんとするもので、高名なイスラム教徒の歴史学者アーメール・アリー『サラセン小史』AMEER ALY: A History of the Saracens などから様ざまな史実を引用している。この章で注目すべき点は第一乃至第六節でマホメット以下諸カリフの社会・経済政策を詳細かつ具体的に示されたこと、第七乃至第十三節でスペインから日本までの各地域におけるイスラムの発展をその伝来から今日の状態まで多くの資料によつて克明に描かれたこと、またヨーロッパの地名にあらわれたイスラム色やニザーム・アル・ムルクの行政学或はオランダのインドネシアにおけるイスラム政策更には日本におけるイス

ラムについて他書には見られない研究が述べられていることがある。この一書をなすほどの厖大精密な論考を博士は謙虚にも最少限度の考察と称せられるが、モスクの建築から幾十百人のスルタンの性格更には石油問題まで殆んどイスラム圏における過去現在の一切にわたる事象に解明を与えられていることは全く例のないことで、次章以下とも相いまつて浅学な吾々には極めて重宝な知識の源泉である。第十四節「イスラムの発展と停滞」^八項は本章の結論をなすもので、発展した原因は教義が単純素朴で実践的であり、民族運動の形をとつたこと、奴隸解放など進歩的な思想を持ち、巧妙な占領地統治策を行つたことなど諸点に求められるが、時と共に宗教の形式化が進むにつれて人心が萎縮し一方では膨張する西洋キリスト教世界が、新航路の発見以後特にナポレオンのエジプト遠征より経済的政治的に急速に侵略して資本主義諸国の植民地化した、今やイスラム教はコーランの民主主義の精神に還るべきであると同時に、イスラム教義の近代化を進めることが必要になつてゐるといふ。

第三章「イスラムの経済思想」pp. 451—594 は経済が社会組織の根本であり、経済こそ社会思想を決定するものであるとの観点に立つて、マホメット生存当時のメツカ経済から現在直面する中近東の経済とその開発までを論ずる。イスラム特有の金錢觀、奴隸制度、貿易状態や海賊の活躍など多くのことについて記されているが、この章で最も興味を引くのは第十二節

「イブン・バッータの旅行記に現れた経済地理」^{十三}と第十二節「イブン・ハルドゥーンの経済思想」^{十四}である。前者はアフリカからシナにまで足跡を及ぼした偉大な旅行家イブン=バッータの旅行記 *IBN BATUTTA: Travels in Asia and Africa, translated and selected by H. A. R. GIBB* から第十回世纪におけるアジアの政治経済、文化を物語る貴重な資料を抽出されたもので、関税について、青年団について、飛脚について地方々々の実状が明示されている。後者はアリストテレスかハマキアギリに至る間の社会科学における最高峰であるイブン=ハルダウーンの業績を彼の不朽の名著『世界史入門』*IBN KHALDUN: Muqaddimah, translated by F. ROSENTHAL* によって示したもので、近代経済学の泰斗アダム=スミスもその遙かに早く労働価値説を主張したこと、富の社会的性格を明らかにしたこと、ジョン=ジャック=ルソーに先んじて契約思想を語つしたことなどを述べて独創的思想家で社会の進歩を確信し社会革命を信奉した偉大な人物であると結論する。今日ではこの両イスラム教徒の名は大体知られているが、その内容についてはマルコ=ポーロやマルクスの百分の一にも及んでいない。大部でしかも難解な両書からかくも見事にその特色を浮ぼりされた博士の功績は誠に大である。

第四章「イスラム法」pp. 595—756 は著名な法学者マジド=

ハッジウリーの最新の書『イスラムの戦時法と平時法』*MAJID KHADDUR: War and Peace in the Law of Islam* などに拠つてイスラム法の基本概念から実際面までを述べたもので、イスラム教徒と接觸する際最も必要な知識が博士の豊かな学識によつて平易に説かれている。泥棒は正しい信者のことなみをねおたげる者やマジハーディの対象として異教徒に対する戦争と等しく戦時国際法が適用されることなど多くの読者に初耳である。イスラム法では曖昧な国家の法律的基礎について明確に定義されたこと、現在のイスラム諸国では本来のイスラム法と各国の慣習及び主権者の意思に基く法律との二体系が存在することやローマ法の影響が存在することなどを論じられたことは法学博士たる著者の真髄を遺憾なく現わしたものである。

第五章「イスラムの文化思想」 pp. 757—852 はサラセン文化はギリシャ文化の上に輝かしい花を咲かせたものであり、またアラビア語に翻訳されたギリシャ文献がやがてラテン語に重訳されて西欧文化に大きな影響を与えたという世界史的な見地からイスラム文化の発展を把握したもので、本書の終章をなす。後半の三節は「イスラムの異教徒対策」「アラビアン・ナイトに現れたイスラム思想」「日常生活」の題で今まで誰もなし得なかつたサラセン世界のエキセントリックな生活をヴィヴィッドに描いてあますといふのがない。幾百年前の古書に息吹を呼び、イスラムの文化的価値を如実に示すことは異常にシヤ

一ナリストとして活躍された博士のみが能くなしうることである。

紙面に限りがある上に浅学の身ゆえ博士の厖大な論旨をじゅうぶんに述べることが出来ないのは遺憾であるが、イスラムの眞の姿は、平和の宗教である。ゆえに今後もイスラムは人類と共に發展するであろうという本書の結論は斎藤博士二十有余年の机上・実地にわたる深く広いイスラム研究の結晶である。

わが国のイスラム研究は第十八世紀初頭の新井白石を鼻祖に、明治に入つてはタウンゼント訳註、永峰秀樹重訳の『馬哈默伝』（驚奇暴夜）1876など洋書の翻訳から始まり、第二十世紀に入つてようやく學術的な研究に着手された如くで、社会思想の研究などまだ先のことであろうと思われていた。この秋にあたつて博士が文字通り学界空前の八八〇頁に及ぶ大著を発表されたことは古い伝統を持つ西洋のイスラム学でも未だ及ばない大事を成しとげられたもので、誠によろこばしい限りである。今後も博士が得意とせられる専門の分野において更に第二、第三の巨弾を放つて学界に輝きをまされんことを切に期待する次第である。

昭和三十九年四月五日発行
八八〇頁 定価二千八百円

執筆者紹介

前嶋信次	慶應義塾大学文学部教授
伊藤清司	同 専任講師
米田治同	専任講師
高橋琢二	同 塾監局教務部勤務
太田次男	同 附属研究所 斯道文庫専任講師
渡辺宏	郁文館高校教諭